様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：５６１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８９０６５

研究課題名（和文）高齢者の外出・交流活動を促進する木造密集市街地の改善モデルプラン

研究課題名（英文）A model plan of improvement of densely-built wooden house districts to promote outing of the elderly and association as neighbors

研究代表者
池添　純子（奥山純子）（IKEZOE, Junko）

阿南工業高等専門学校・創造技術工学科・助教

研究者番号：５０５１５６２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：高齢者の社会的孤立を防ぐためには、高齢者が外出や交流活動がしやすい居住環境の整備が重要である。これらは個体性による差があることは言うまでもないが、居住地域の影響による差があることも考えられる。
そこで本研究では、様々な居住環境が混在する複数の地区でデータを収集することで個体性や地域性によらない「住宅地の特性」と「高齢者の外出・交流活動」の関係を明らかにすることを目的とし、大阪府と東京都の自治体で全18地区448名の高齢者に対するアンケート調査を行った。
また調査結果をもとに、劣悪な環境といわれて注目されることが多い木造密集市街地を高齢者にとって住みやすい住宅地に改善するための新たな視点を検討した。

研究成果の概要（英文）：This research considers and discusses on living and residential environment to promote the outing behavior of the elderly and association as neighbors and to avoid the social isolation of the elderly. I obtained the data basis by conducting the questionnaire survey over the elderly living within several different elementary school areas.
The strong point of this investigation is to clarify the general relationship between “the residential characteristics” and “the living behavior of the elderly outing behavior and association within neighborhood” independent of individuals (e.g., personality, health, or family relations) and regionality by carrying out and comparing the surveys in several different areas. A proposal is given to attain the improvement plan of densely populated wooden building districts on the basis of this investigation.

研究分野：地域計画

キーワード：高齢者　外出行動　交流活動　居住環境

１．研究開始当初の背景

高齢者の独居世帯の増加に伴い、今後ますます高齢者の孤立は社会的問題として対策を講じる必要がある。このような孤立を防ぐためには、高齢者が外出したり交流活動がしやすい居住環境を整備し、心身ともに健康を維持することが重要である。

外出や交流活動は、性格や身体状況などの個体差によることは言うまでもないが、個体性が同じ場合、住環境による違いがあるのではないか。では、高齢者にとって最も外出行動や交流活動がしやすい理想的な住環境とはどのようなものか。

1970 年代初めに提唱された「住宅双六」は、生涯における住宅嗜好のひとつのモデルであった。人生の最後は、郊外庭付き一戸建て住宅を購入して上がりというものである。このようなストーリーは、若い世代の目標としては良いが、子どもが独立してから高齢者だけで長期間居住する高齢者世帯の目標となると疑問が生じる。郊外の住宅地では高齢者施設・医療施設が少ない、住宅地に傾斜が多く歩きにくい、家から道路までに段差がある、庭の手入れが大変、見守りが困難等のマイナス面がすでに指摘（志田ら,2005～2009 など）されている。

一方、木造賃貸住宅が建ち並ぶ密集市街地は防災、環境などでのマイナス面が指摘されるが、下町的なコミュニティが残り、平坦で外出しやすい、住宅と商業施設が混在していて住みやすいなど、住環境としてプラス評価と言える意見も聞かれる。これらについては一般的によく指摘されることだが学術的な調査はほとんどなく、感覚的な指摘にとどまっている。

２．研究の目的

そこで本研究では、かつて理想の住宅地と言われた郊外庭付き一戸建て住宅地と、住宅の更新が遅れており、都心に近いにも関わらず極端な高齢化と地域環境の悪化が進んでいる木造密集市街地に注目し、以下を明らかにすることを目的とする。

(1) 居住環境により高齢者の外出行動・交流活動がどのように異なるのか
(2) (1)を踏まえた木造密集市街地を高齢者にとって住みやすい住宅地に改善するための視点

３．研究の方法

居住環境の異なる地域に居住する高齢者に対してアンケート調査を行い、その調査数を増やすことで個体性や地域性によらない統計的分析を可能とすることを目指した。

できるだけ多くの自治体で調査できるよう検討したが実現できなかった地域もあり、研究期間内に実施できた調査地は、大阪府寝屋川市（2014 年）、大阪府豊中市（2015 年）、東京都豊島区（2015 年）である。調査方法は、大阪府では社会福祉協議会が小学校区ごとに開催する会食会場（参加者は校区内の高齢者）、東京都では小学校で児童とともに給食を食べる食事会場（ただし参加者は校区内居住者とは限らない）に調査者が出向き、その場で調査票の配布説明・回収を行った。自治体内で調査が可能な地区の選定は、主催者である社会福祉協議会（東京は区役所）に依頼した。

調査項目は以下の通りである。

① 高齢者の状況：属性、家族構成、健康状態、住宅特性など
② 外出行動：利用可能な移動手段（徒歩,自転車,バイク,電動カー,車,電車,バス,タクシーなど）、日常的な外出４種（買物,かかりつけ医,銀行,墓参り）の所要時間・移動手段・頻度、外出しやすさの主観的評価、外出しにくい理由、外出時「困る」ことの評価
③ 交流活動：近所付合い（あいさつ・立ち話・来訪・往訪）の頻度、近所付合い（鍵

の預け・ものの受渡・一緒に出掛ける・悩み事の相談）の有無

④ 理想の住宅地：自宅とその周辺地域の重視度（家や庭が広い,防災面,防犯面,買い物,福祉施設・病院が近い,公共交通の便,歩きやすい,静か,地域の交流・祭りが盛ん,家族・親戚・友人の家が近い）

プレ調査を行った大阪市淀川区（2013 年）を含めると、全 18 地区 448 名の高齢者から回答を得られた。各地区の回答者数と調査地の概要を表１に示す。

４．研究成果

(1) 回答者の属性

回答者の属性の一部を図１に示す。年齢は、70 歳代が最も多く、男女比は約 9 割が女性であるが、FP 地区は男性が 4 割を占める。家族構成は全体の 4 割が一人暮らしで、夫婦のみと一人暮らしを合わせると約 7 割を占める。

住宅の種別と所有形態は地区により異なり、JKLM 地区は戸建て、HI 地区は集合住宅、JK 地区は持家、HI 地区は賃貸が多い。居住年数は、30 年以上が全体の 6 割以上を占める。

介護認定は約 8 割が認定を受けておらず、多くが主観的に健康であると感じている。

表１　調査概要

自治体名（計　人）	地域名	回答者数（人）	地域特性
淀川区（118）	A	20	駅前の木密地域
	B	39	商店街近隣地域
	C	29	集合･戸建て混在
	D	30	電車駅近
寝屋川市（193）	E	28	木密含む
	F	44	男性参加者最多
	G	20	電車駅近
	H	24	府営団地･坂あり
	I	31	府営団地･平坦
	J	26	3階建て住宅地
	K	20	幹線道路近隣
豊中市（88）	L	40	郊外住宅地･坂あり
	M	48	郊外住宅地
豊島区（49）	N	12	会食会へは、小学校区以外の地域からの参加者も含む
	O	13	
	P	7	
	Q	6	
	R	11	
	計	448	

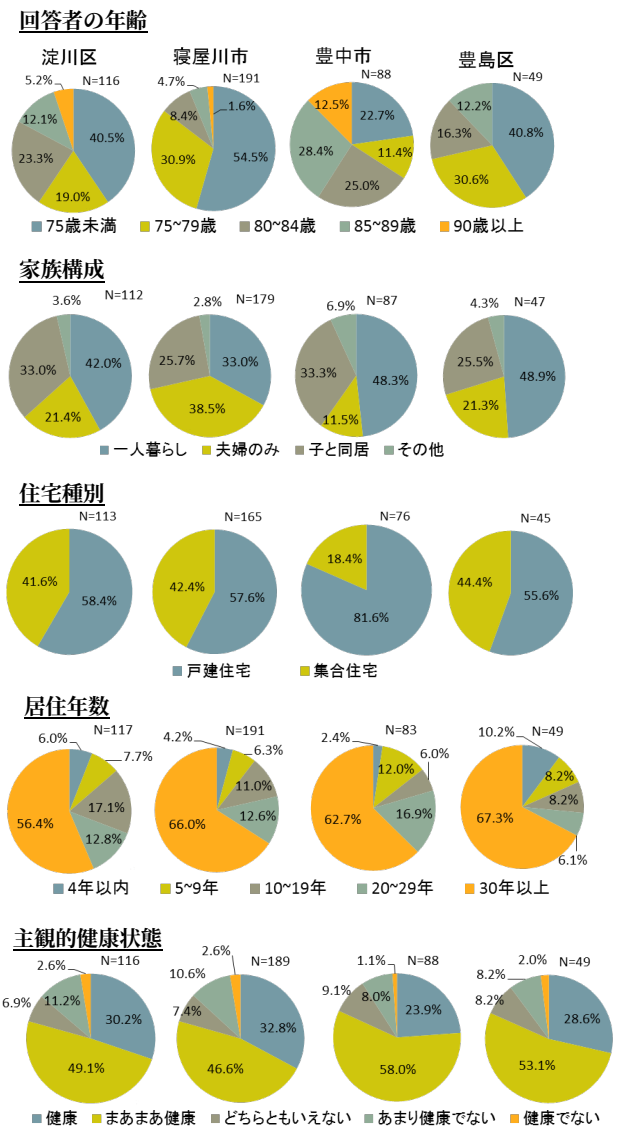

図１　回答者の属性

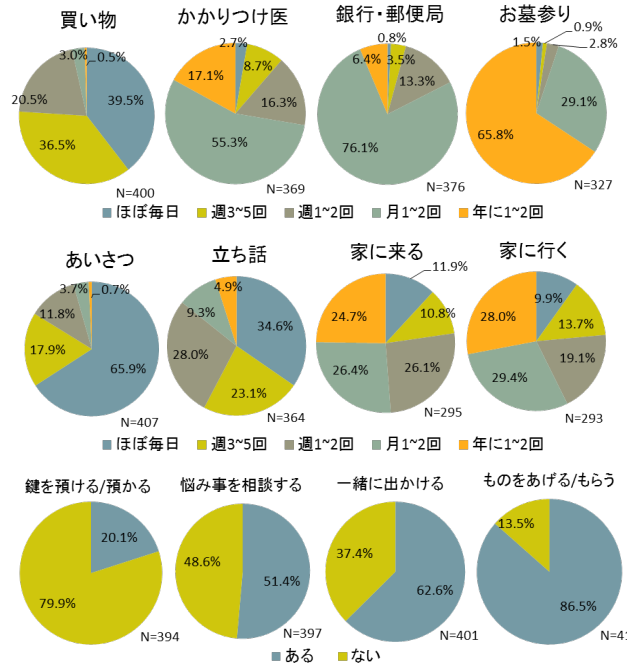

図２　外出・交流活動の状況

表２　地区ごとの特性

地域名	住宅種別	住宅所有	移動手段						外出	交流			
			徒歩	自転車	家族の車	電車	バス	タクシー	通院	家に来る	家に行く	一緒に出掛け	悩み相談
A										○	○		
B						×							
C													
D			○	○		○							
E													
F									×				×
G					○	○							
H	集	賃		×					×				
I	集	賃	×			×		×	○				
J	戸	持		○	○	○	○					○	
K	戸	持		○									○
L	戸			×			○	○					
M	戸							○		×	×		

(2) 外出・交流活動の状況

外出・交流活動の状況を図２に示す。また表２は、回答者数が 20 名以上いる地区と各設問項目をクロス集計し、検定により 5%または 1%水準で有意な差がみられた項目である。移動手段の○は利用傾向が強く×は利用傾向が弱いことを示す。外出・交流活動の頻度を問う設問は、5 段階では有意な差がみられなかったため、“週 1～2 回”以上とそれより少ない頻度で回答を統合し分析を行った結果である。○は頻度が多く×は頻度が少ないことを示す。

外出頻度をみると、“日常的な買い物”は約 8 割が週 3 日以上である。居住環境の影響について、店舗までの所要時間や移動手段、地区との関係で分析を深めたが、検定による有意な差はみられなかった。

一方で、外出するときに利用可能な移動手段は地区により違いがみられた。“徒歩”は、駅に近く駅前には商店も多い D 地区では利用傾向が強く、住宅団地の周辺には店舗が無く買い物弱者支援が取組まれている I 地区は他地区より利用傾向が弱い。“自転車”は、坂がある HL 地区では利用傾向が弱い。“タクシー”は郊外住宅地である LM 地区で利用傾向が強いことが分かった。

交流活動は、“家に来る”“家に行く”頻度が、木造密集市街地である A 地区で多く、郊外住宅地のような他地区よりも住宅を中心とした近隣関係が密であり、新たな市街地改善策にはこの関係維持の視点が重要である。

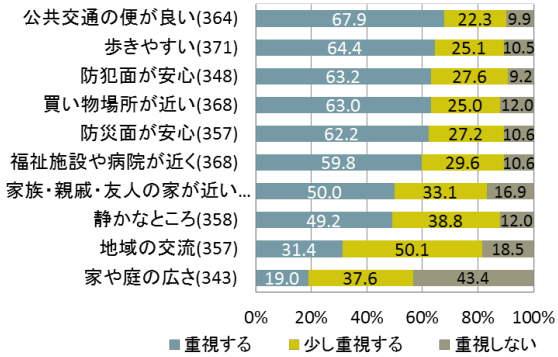

図３　理想の居住環境

(3) 今後の展望

理想の居住環境（図３）では、住宅の広さよりも、外出に関連する公共交通の便や歩きやすさを重視する回答が多く、やはり外出しやすい居住環境が求められていることが分かる。しかし今回の調査では、対象者がすでに会食会場に出席している方であり、外出時に困ることや外出しにくさがあると感じている回答は全体的に少なく、現状の外出阻害要因を把握できなかった。また、本調査により木造密集市街地のコミュニティ特性はみられたが、未だ一般化できるほどの調査数には達していない。今後も引き続き調査を継続し、今回得られた示唆を確実なものにしたい。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計１件）

池添純子：高齢者の居住環境と外出行動に関する基礎的研究 その 3　大阪府寝屋川市を事例として、2015 年度日本建築学会大会（関東）学術講演会、神奈川県・東海大学、2015.9.6

６．研究組織

(1) 研究代表者

池添　純子（奥山純子）（IKEZOE Junko）

阿南工業高等専門学校・創造技術工学科・助教

研究者番号：５０５１５６２４

(2) 研究分担者　　なし

(3) 連携研究者　　なし